

# 花



mio

# 花

---

花といっしょにくらしていました。

「おはよう」

「空がきれいだね」

「夕陽があかねいろだよ」

「星がぴかぴかひかっているね」

花とは、まいにちおはなしをしました。

いっしょに、空や夕陽や星をながめました。

空もようや、けしきを見ながら、花は水を、わたしはお茶を、のんだりしました。

「おいしいね」

「うん、おいしいね」

水をのむとき、花は、花びらや葉っぱを、ひらひらとゆらしました。

とてもうれしそうでした。

けれども、ある日、花とわかれなければならないときがやってきました。

それはとつぜんでした。

花は、わたしのそばからいなくなりました。

花といっしょにはなしたり、お茶をのんだり、空や星をながめたりする日々を、

ずっとつづけたいとねがっていたのに。

わたしはうずくまりました。

うずくまったまま泣きました。

もどらない花を思っては、何年も何年も、泣きくらししました。

涙もかれたころ、おそろおそろ顔をあげてみました。

そこには

花の種をまいているおばあさんがいました。

花の苗を植えているおじいさんがいました。

花畑に水と肥料をまいている青年がいました。

花束をかかえて、いそいそと歩く娘さんがいました。

わたしは、何年かぶりに、口をひらいて、この人たちにきいてみよう、と思いました。

「わたしの花がなくなりました。

どこにいったのでしょうか。

だれかしりませんか」

土になったのよ

星になったんだよ

あなたの心になったんだよ

あなたのそばにずっといるよ

こたえはいろいろでした。

おばあさんは、わたしに種をくれました。

おじいさんは、苗をわけてくれました。

青年は、花のつぼみを見せてくれました。

娘さんは、花束をわたしに、もたせてくれました。

いなくなった花は、もうずっといないままです。

花が、土や星や心になったり、わたしのそばにいるということが、ほんとうなのか、たしかめようはありません。

このかなしみがきえることは、ないでしょうけれど、わたしは、この場所に、種をまくことにしました。

こころのどこかに咲く花には、会えるような、そんな気がしています。

「花」〈fin.〉

## 花

<http://p.booklog.jp/book/122492>

著者 : mio

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/fairyringstudio/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122492>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト